ベネッセ次世代育成研究所より

乳幼児の父親についての調査

調査企画・分析メンバー

汐見　稔幸　（東京大学大学院　教育学研究科教授）
大日向　雅美　（恵泉女学園大学　大学院教授）
後藤　憲子　（ベネッセ次世代育成研究所）
高岡　純子　（ベネッセ次世代育成研究所）
真田　美恵子　（ベネッセ次世代育成研究所）
木村　治生　（Benesse教育研究開発センター）
邵　勤風　（Benesse教育研究開発センター）

「乳幼児の父親についての調査」（仮題）報告書は、2006年3月に刊行予定です　。

本調査の詳細な分析をまとめた「乳幼児の父親についての調査」（仮題）報告書（150ページ程度、頒布予定価格1000円）を、2006年3月に刊行する予定です　。
この報告書をご希望の方は、添付のアンケートハガキをご利用いただき、希望する冊数をご記入の上、ご投函ください。発刊次第、お送りいたします。
なおこの報告書は書店ではお求めになれません。
直接、ベネッセ次世代育成研究所にお申し込みください。

アンケートにご協力ください。

この調査に関するご意見・ご感想を、添付のハガキにてお聞かせください。
なお、本調査に関するお問い合わせは、下記までお願いします。

〒206-8686　東京都多摩市落合1－34
㈱　ベネッセ次世代育成研究所　「乳幼児の父親についての調査」係
TEL：042－356－0843　　fax：042－356－7306
受付時間／10：00～17：00（土日・祝日を除く）

「乳幼児の父親についての調査」速報版
発行日：2006年1月31日　発行・編集人：岡田 晴奈　発行所：㈱ ベネッセ次世代育成研究所
888888　この冊子は、再生紙を使用しています 。

速報版

乳幼児の父親についての調査

乳幼児の父親の子どもへの関わり、仕事と家庭のバランス、育児観・教育観等の実態

ベネッセ次世代育成研究所では、
0歳から6歳までの子どもを持つ父親を対象に 、
子どもと関わる様子、家族との絆、仕事と家庭のバランスなど、
乳幼児を持つ父親の家庭生活の実態や子どもや家族に対する意識を
とらえることを目的にアンケート調査を実施しました。
今回お届けする「速報版」は、この調査の結果から
いくつかの特徴的なデータを取り上げてご紹介するものです。

私たちは、次の点に関心を持ち、今回の調査を行いました。

- 父親の家事育児への関わりの実態
- 家族（妻、子ども）の絆と父親としてのスタンス
- 父親の仕事と家庭のバランスに対する考え方と実態
- 配偶者の就業に関する考え方と分担
- 父親の子育て観、将来の子どもへの期待
- 子育てに対する期待と不安

『ベネッセ次世代育成研究所』については、次ページをご覧ください。

ベネッセ次世代育成研究所について

ベネッセコーポレーションは、1988年にこどもちゃれんじ事業部を発足させて幼児向け通信教育講座を開講しました。現在、135万人の会員を擁するに至っています。また、1993年には、「たまごクラブ」「ひよこクラブ」を、1996年には「こっこクラブ」を創刊し、いずれも好評を得ています。ベネッセコーポレーションは進路支援・通信教育を中心とする教育事業の会社として出発しましたが、この10年余り、育児や幼児教育にも事業を広め、保護者との関わりを大きく広げることができるようになって参りました。

今年度から「子ども・子育て応援プラン」と次世代育成支援対策推進法が施行され、日本の子育て支援事業・活動も新しい局面を迎えようとしています。合計特殊出生率が1.29まで低下し、少子化に対する社会の関心も今までになく高まっています。こうした時代だからこそ、ひとりひとりが家族とともに生きる喜びを味わえるようになることが重要になります。今、子育てをしている世代が求めているのは、そのための知恵や助言といってよいでしょう。

私たちは、子育てや家庭教育に関する有意義な情報を多くの方々に発信することをミッションに、ここに独立した研究機関、（株）ベネッセ次世代育成研究所を設立します。調査・研究活動を通して、未来に向かって次の世代、さらには次の次の世代が「良く生きる」ことを支援する提案を行っていきます。

◆調査概要

調査テーマ 父親と子どもとの関係、家族関係、父親の仕事と家庭のバランスなど

調査方法 インターネット調査

調査時期 2005年8月5日（金）～7日（日）

調査対象 0～6歳4ヶ月（就学前）の子どもをもつ父親

調査地域 首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）

サンプル数 2958（有効回答数）
＊年齢別構成
0歳児…430、1歳児…467、2歳児…468　3歳児…473　、
4歳児…488、5歳児…480、6歳児…152
＊６歳児は、就学前のみを対象としているため、６歳 0～4ヶ月である。

調査項目 子どもと関わる時間（平日・休日）／子どもとの絆／家事・育児の実態と希望／配偶者の就業状況／女性の就業についての意識／配偶者との絆／夫婦の家事・育児スタイル／子育てストレス／子育てで力を入れたいこと／子育ての将来への不安／理想的な父親イメージ／育児休業制度の活用実態と意向／職場と家庭の考え方／子どもを持つことを後輩にすすめるか／もうひとり子どもを持ちたいか／子どもの将来への期待／進学期待／家族の中の存在感／精神的な絆を結ぶ相手

1 家族との関わり、家事・育児の分担、仕事と家庭

1 平日は、「もっと子どもと過ごしたい」

平日に子どもと過ごしたい時間は「2～3時間」が最も多く32.6%。一方、実際は「1～2時間未満」が最も多く27.0%。希望と現実にギャップがある様子がうかがえる　。

Q あなたは、お子さんとどのくらい一緒に過ごしていらっしゃいますか。

図1-1-1：平日に子どもと過ごす時間の「現実」と「希望」

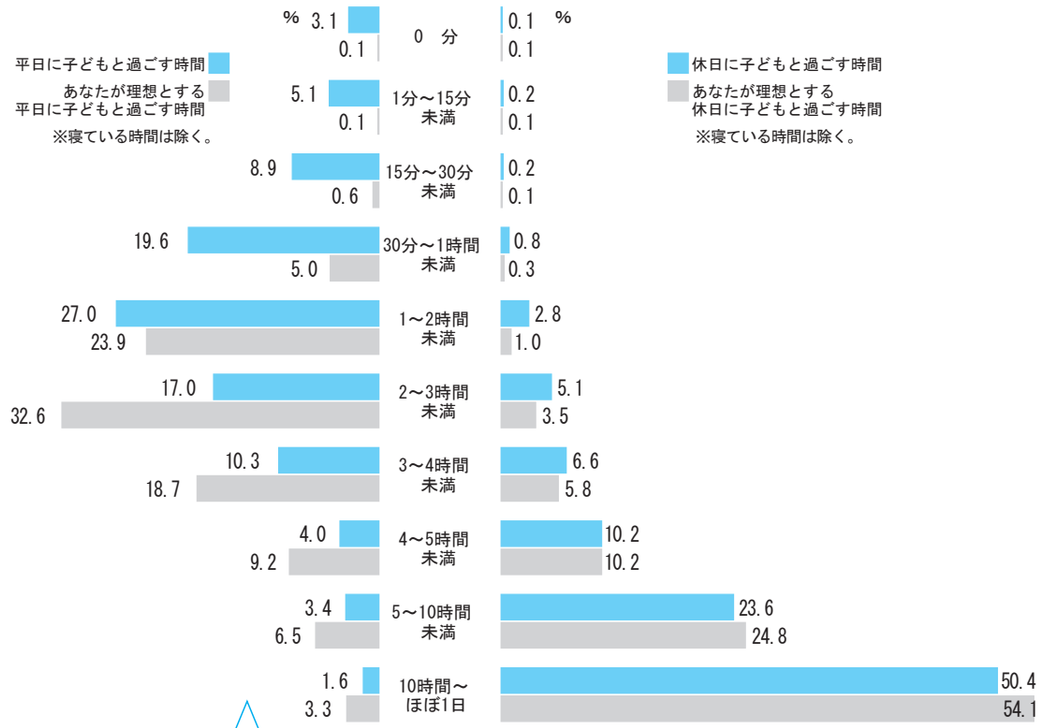


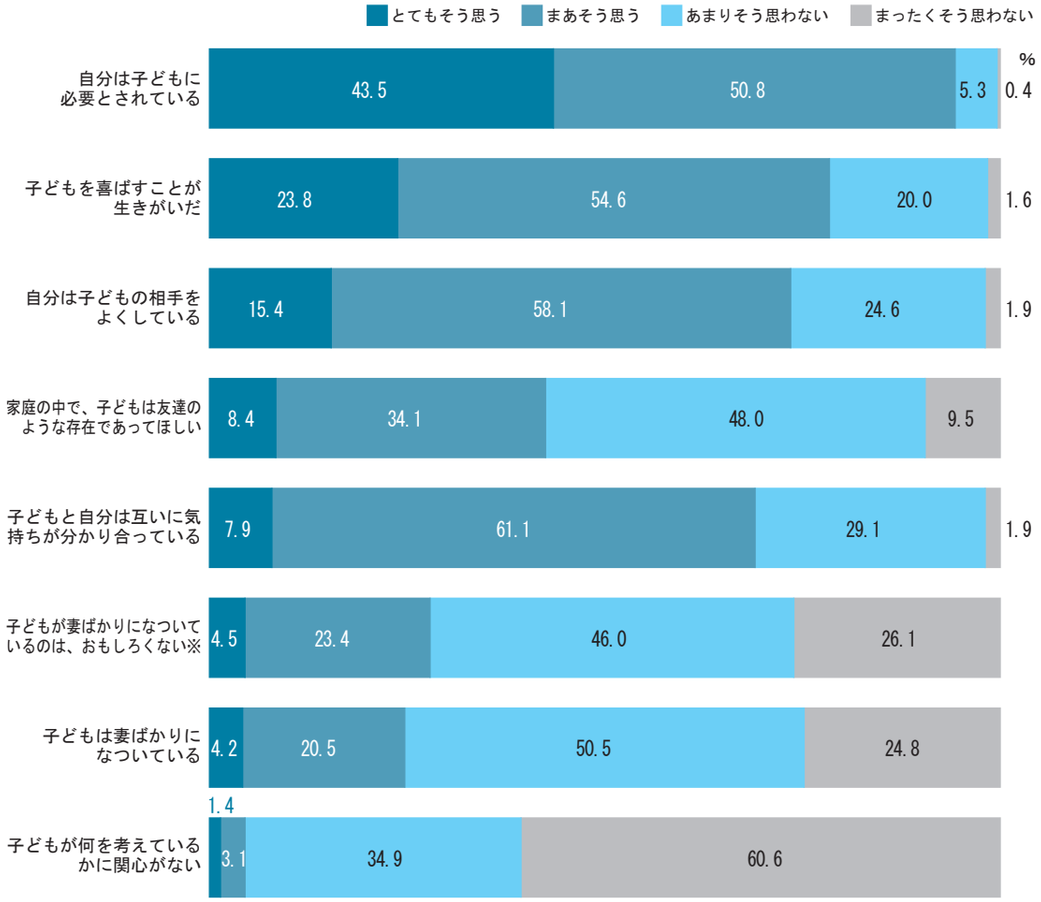
図1-1-1の内訳をさらに見たところ、平日に子どもと過ごす時間が「2時間未満」の場合で、希望と現実に大きなギャップがあり、約8割が実際に過ごしている時間より希望する時間のほうが長くなっている。一方、実際に「2時間以上」過ごしている場合は、4割以上が希望と現実が一致している。また、実際に過ごす時間が長くなるほど、希望と現実が一致する割合は高まる。休日の場合は、実際に過ごしている時間と希望との間に大きなギャップはなかった。

2 4人に3人が「自分は子どもの相手をよくしている」

子どもとの関係について聞いたところ、「自分は子どもに必要とされている」「子どもを喜ばすことが生きがいだ」「自分は子どもの相手をよくしている」と思う割合が「とてもそう思う」+「まあそう思う」で7割を超える。子どもとの関係はおおむね良好ととらえているようだ 。

Q あなたとお子さんとの関係についてお伺いします。

図1-2-1：子どもとの関係



※子どもが妻ばかりになついていない場合は想定して回答。

「自分は子どもに必要とされている」が94.3%（※）、「子どもを喜ばすことが生きがいだ」は78.4%（※）といずれも高い数値になっている。父親の自己評価も、「自分は子どもの相手をよくしている」が73.5%（※）と高くなっている。本調査では、父親のみを対象としたが、機会があれば是非母親からの評価も調べてみたい。

※「とても」＋「まあ」の%。

3 父親の約半数が、出産に立ち会っている。

0歳～6歳の子どもを持つ父親の約半数は、子どもの出産に立ち会った経験を持つ。「立ち会いをしたかったけれどできなかった」人は、28.2%である 。

Q （今回対象となるお子さんにかかわらず）あなたは親として子どもの出産に立ち会いましたか。

図1-3-1：出産に立ち会ったか

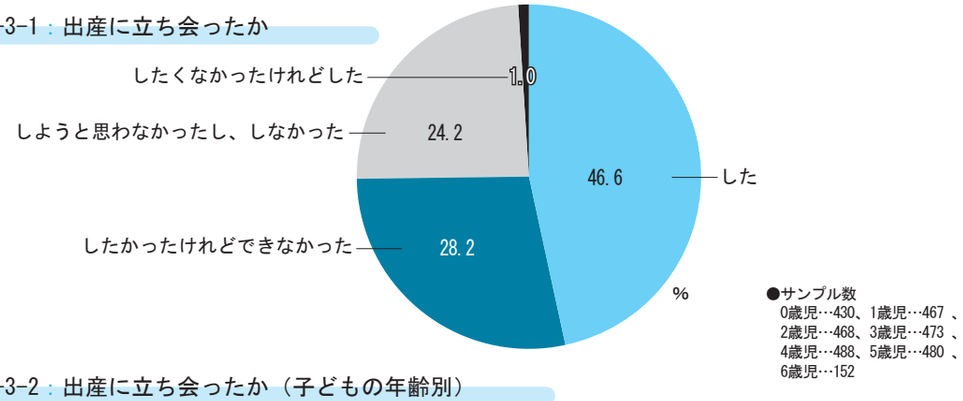
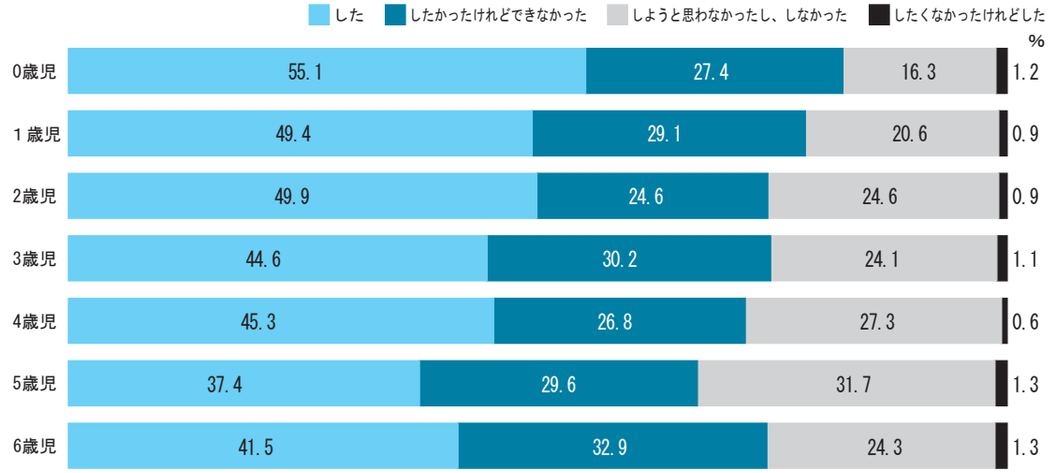


図1-3-2：出産に立ち会ったか（子どもの年齢別）



立ち会い出産を「した」のは、全体で46.6% 。「したかったけれどできなかった」を合わせると、立ち会い出産に対して肯定的な父親は74.8%になる。一方「しようと思わなかったし、しなかった」は24.2%で、4人に1人の割合であった 。
子どもの年齢が低いほど、肯定的に立ち会い出産を「した」比率は増加する。6歳児の父親では41.5%だが、0歳児では、55.1%と半数以上の父親が立ち会い出産を行なっている。年代別では、20代50.2%、30代47.6%、40代41.7%で、若い世代ほど肯定的に出産に立ち会う比率が高い。

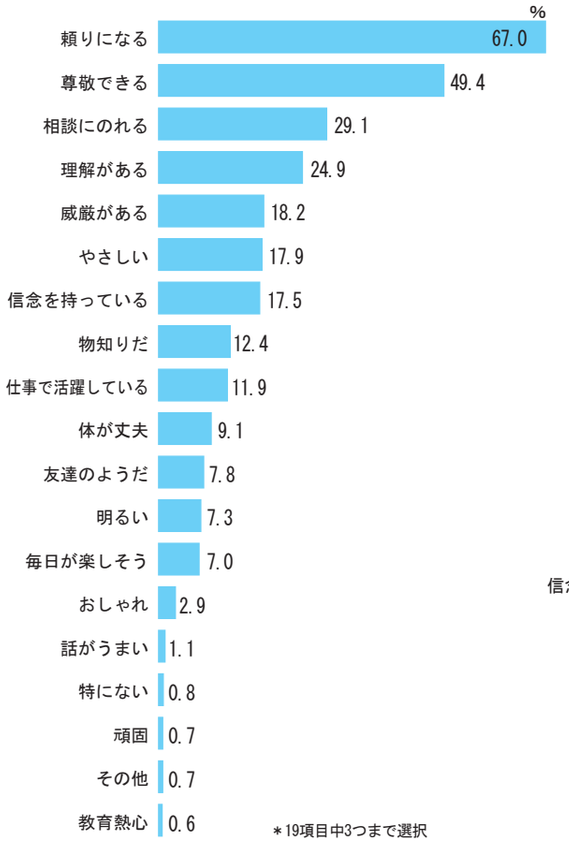
※「したくなかったけれどした」の数値は除く。

4 「頼りになる」「尊敬できる」が理想的な父親イメージ

「理想的な父親イメージ」として多かったのは、「頼りになる」「尊敬できる」「相談にのれる」「理解がある」などである。「頼りになる」「相談にのれる」は年代が上がるほど数値が高くなっている。

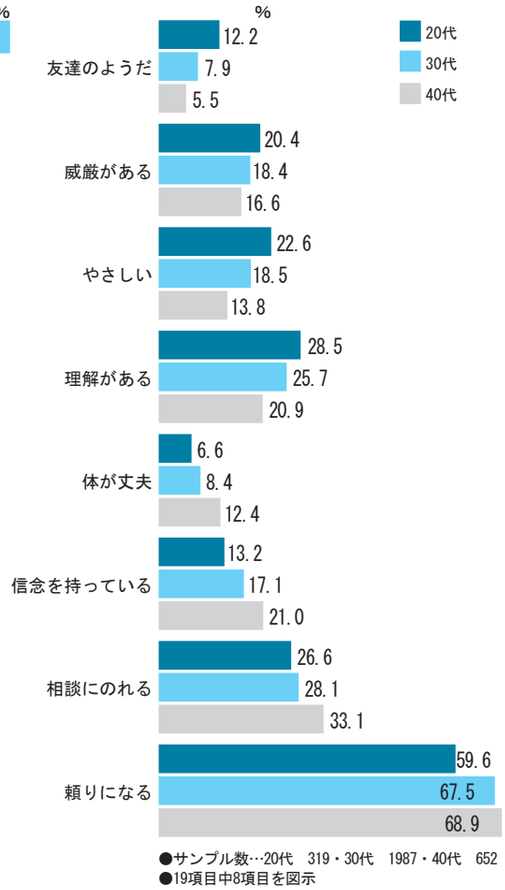
Q あなたの考える「理想的な父親」のイメージを以下の中から選んでください。

図1-4-1：理想的な父親イメージ（全体）



＊19項目中3つまで選択

図1-4-2：理想的な父親イメージ（父親年代別）



●サンプル数…20代　319・30代　1987・40代　652
●19項目中8項目を図示

年代別に比較した場合、年代が上がると減少する「理想的な父親イメージ」は、「友達のようだ」「威厳がある」「やさしい」「理解がある」であった。逆に、年代が上がると増加するイメージは、「体が丈夫」「信念を持っている」「相談にのれる」「頼りになる」である。40代では「頼りになる」「相談にのれる」など、臨機応変さが求められる項目が並ぶなど、年代による違いは、社会変化を背景にした世代の差というよりも、父親の人生経験や子育て経験の差が影響しているものと思われる。

5 父親がよくする家事・育児は「ごみを出す」「子どもを叱ったり、ほめたりする」

家事・育児に関する11項目について、１週間にどのくらいするかを聞いたところ、よくするのは「ごみを出す」「子どもを叱ったり、ほめたりする」。逆にあまりしていないのは、「子どもと一緒に外で遊ぶ」で「ほとんどしない」と「週に１～２回する」で9割以上をしめる。

Q あなたは、次のようなことについて、どれくらいしていますか。

図1-5-1：父親が家事育児をする頻度

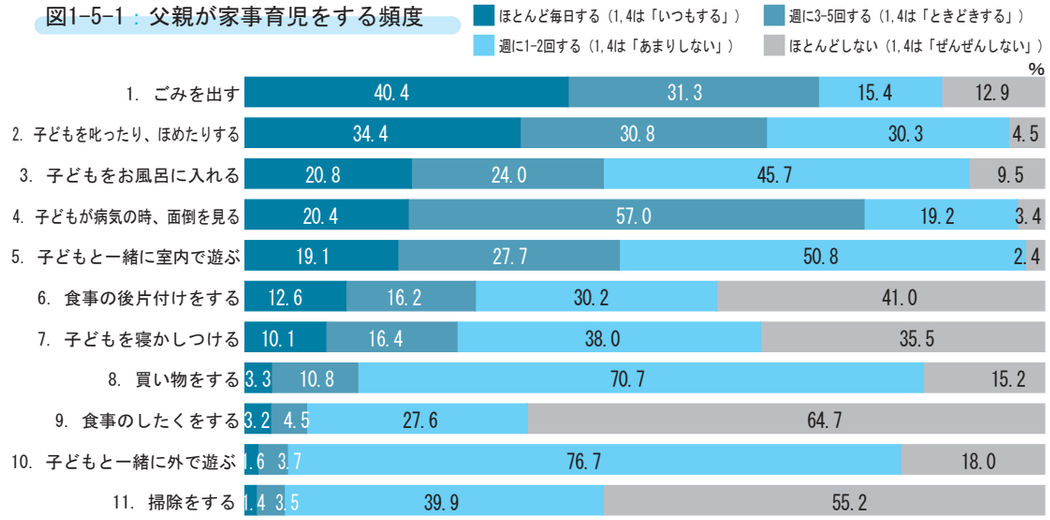


図1-5-2：家事や育児に今まで以上にかかわりたいか

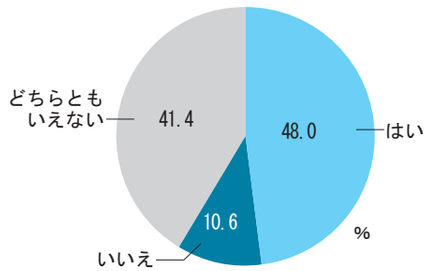
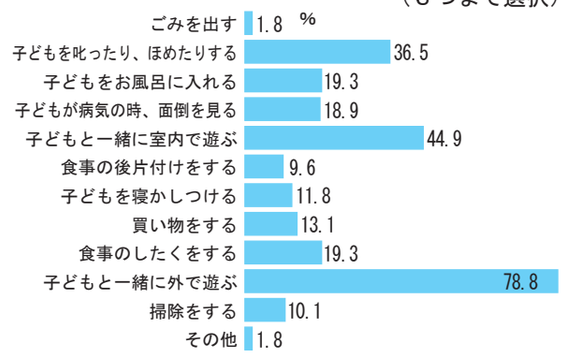


図1-5-3：もっとかかわりたいと思っているもの（３つまで選択）



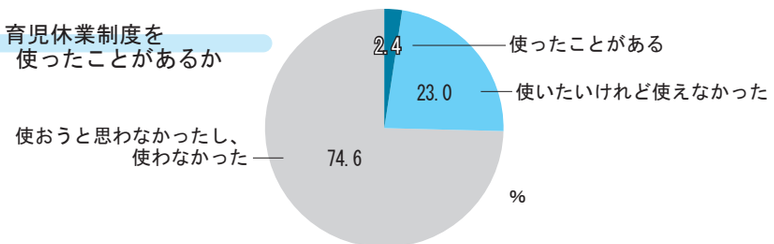
「家事や育児に今まで以上にかかわりたい」の質問に「はい」と答えた48.0%に、「もっとかかわりたい」と思っているものを聞いたところ（複数回答3つまで）、78.8%が「子どもと一緒に外で遊ぶ」を選んでいた。全体的に父親は、家事への関わりよりは育児への関わりが多い傾向にあった。参考までに、これらの項目を、母親対象にとった別のアンケート（2005年「第3回幼児の生活アンケート」Benesse教育研究開発センター）と比較してみたところ、どの項目も父親の自己評価のほうが高かった。

6 父親の育児休業の取得率は2.4%。取らなかった理由は…

今回の調査では、育児休業制度を「使ったことがある」のは2.4%だった。使わなかった理由で多いのは「職場に迷惑をかけるから」、「忙しくてとれそうもないから」だった。

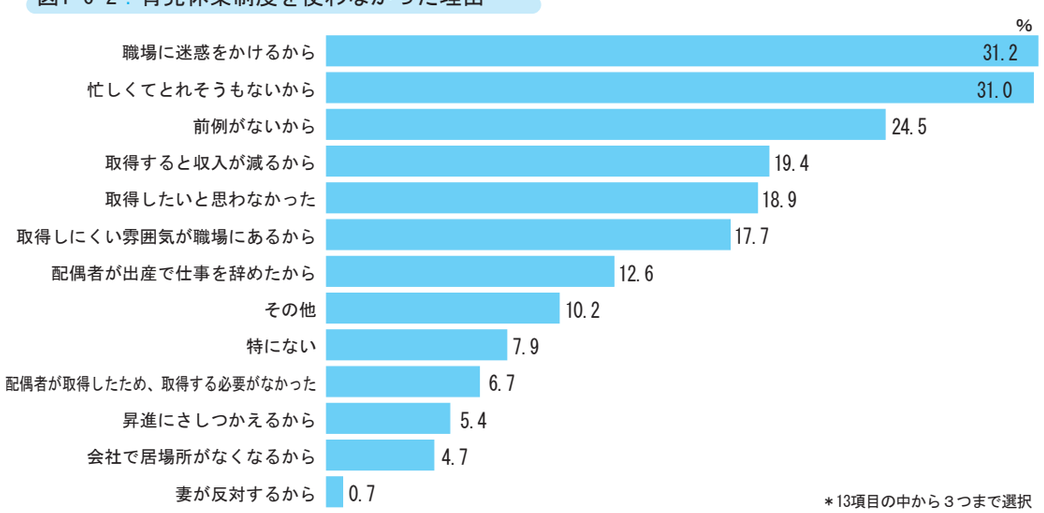
Q あなたは育児休業制度を使ったことはありますか。

図1-6-1：育児休業制度を使ったことがあるか



Q 育児休業制度を「使いたかったけれど使えなかった」「使おうと思わなかったし、使わなかった」と答えた理由を教えてください。

図1-6-2：育児休業制度を使わなかった理由



＊13項目の中から３つまで選択

今回の調査では、育児休業を「使ったことがある」と答えた父親は全体の2.4%であった。平成16年度の厚生労働省の調査（女性雇用管理基本調査）では、0.56%なので、全国的な調査よりは高い数値が出ている。今回の調査は首都圏の会社員の割合が高く、男性が育児休業制度を取れる会社に所属している人が多いためと思われる。

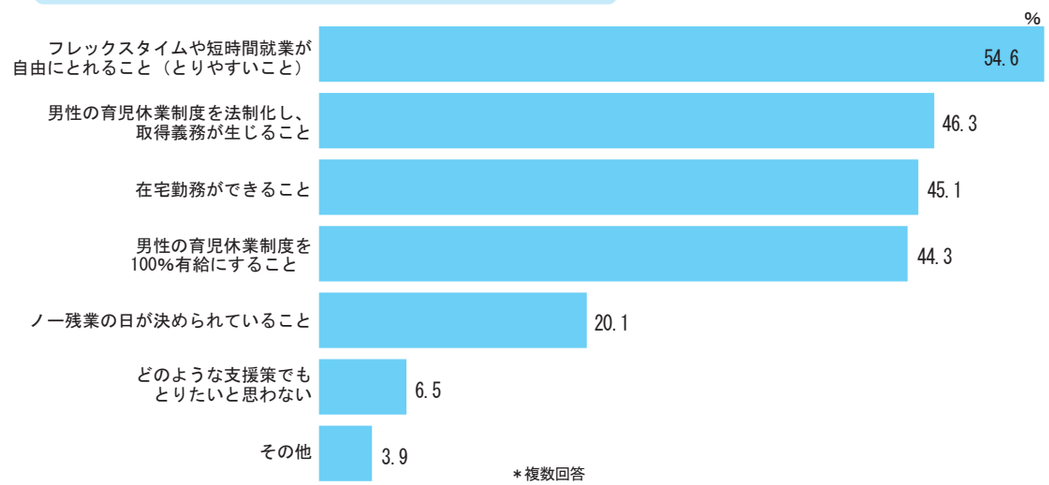
育児休業を使わなかった理由としては、多忙（職場に迷惑をかける、忙しくてとれそうもない）や収入減、職場の雰囲気（前例がない、取得しにくい雰囲気が職場にあるから）が上位に来ている。「取得したいとは思わなかった」と答えた人も18.9%いた。

7 父親が使いやすい子育て支援策は？

父親が使いやすいと思う子育て支援策としては、フレックスタイムや短時間就業、在宅勤務などの「柔軟な勤務形態」と育児休業の法制化や休業中の100%有給など「法的制度の充実」が多かった。

Q あなたが使いやすいと思う子育て支援策はどのようなものですか。

図1-7-1：使いやすいと思う子育て支援策は



＊複数回答

◆参考情報◆

法律上は男性労働者も女性労働者も育児休業を取得できることになっている。しかし、現在の育児・介護休業法では配偶者が専業主婦（専業主夫）であったり、育児休業を取得して育児に専念している場合には、夫（妻）である労働者は育児休業を取得できないという規定を、労使協定があれば就業規則等に盛り込むことができる。

今回の調査では、育児休業を取れなかった（取らなかった）理由の中で「その他」と回答した人には具体的理由を自由記述してもらったが、「会社に制度がなかった」「妻が専業主婦の場合、取得が不可だから」という回答が散見された。

ただし、妻が専業主婦であっても、産後８週間は、育児休業が取得できる。この期間は母体回復のための期間であり、「育児に専念できる」とはみなされていない。同様に働く妻が産後８週間の産後休業を取得している場合も、夫は育児休業を取得できる。このことは意外と知られていないのではないだろうか。

「フレックスタイムや短時間就業が自由にとれること」54.6%、「在宅勤務ができること」45.1%、と＜柔軟な働き方＞を希望する人が多かった。また、「男性の育児休業制度を法制化し、取得義務が生じること」46.3%、「男性の育児休業制度を100%有給にすること」44.3%、のように法的制度の充実を選択する人も多かった。厳しい職場環境の中で父親が育児に参加するためには法的なバックアップが必要と感じている人が多いことが分かる。

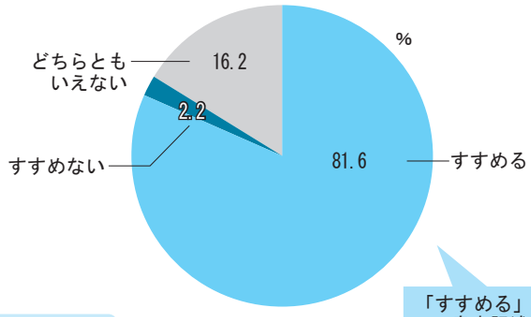
一方で「どのような支援策でもとりたくない」を選択した人も6.5%いた。「その他」を選択した人には、具体的支援策を自由記述してもらった（その他を選択した人は116人。うち114人が自由記述に回答）が、内容を見ると、育児手当などの経済的支援を求める声が多かった。

8 81.6%が「子どもを持つことを後輩にすすめる」

父親の年齢、子どもの年齢などによる大きな差はなく、8割以上が「子どもを持つことを後輩にすすめる」という結果に。最大の理由は、「自分が成長できるから・得るものがあるから」。

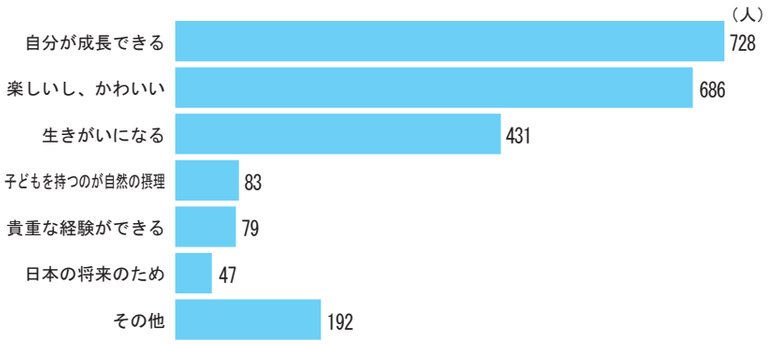
Q あなたは、子どもを持つことを、後輩にすすめますか。

図1-8-1：あなたは、子どもを持つことを後輩にすすめますか



＊以下は、自由記述をコーディングしたもの（2726サンプル）

「すすめる」理由



「すすめる」理由の自由記述より

- 子どもによって自己が成長させてもらえるし、親が自分へ注いでくれた愛情への理解が深まり孝行心も深まるから
- こんなにかわいい存在には出会ったことがないから
- 子どもを育てることで、今までにない幸せや責任を感じることができ、人生の質が向上すると思うから
- 人生の宝物が手に入るから

「すすめない」理由 （人）

個人の自由・人それぞれ	17
経済的に大変	16
自由がなくなる	10
その他	14

「どちらともいえない」理由 （人）

個人の自由・人それぞれ	318
経済的に大変	20
楽しいけれど大変	18
その他	67

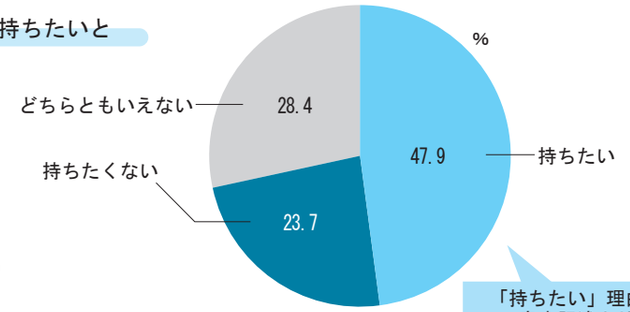
8割が「子どもを持つことをすすめる」と回答している。「すすめない」は2.2%と非常に少ない。「すすめる」理由としては「自分が成長できるから・得るものがあるから」「子どもは楽しい・かわいいから」という声が多い。家族・夫婦にとっての子どもについて言及したものは少なく、「家庭が明るくなる」「子はかすがい」はそれぞれ36件、27件であった。一方「すすめない」「どちらともいえない」理由では、「個人の自由」「経済的に大変だから」が多い。

9 約半数が「もう一人子どもを持ちたい」と思う

また、「持ちたくない」は23.7%、「どちらともいえない」は28.4%で、合わせると全体の約半数を占める。持ちたい理由では、「今いる子どものために」「一人っ子はかわいそうだから」が多い。持ちたくない・どちらともいえない理由では、経済面での不安が最も多かった。

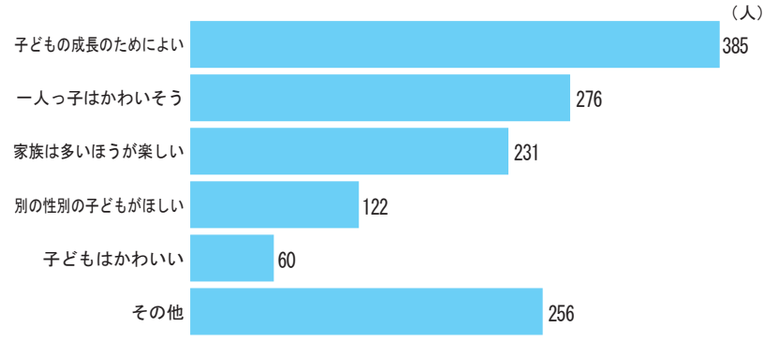
Q あなたは、もう一人子どもを持ちたいと思いますか。

図1-9-1：もう一人子どもを持ちたいと思いますか



＊以下は、自由記述をコーディングしたもの（2726サンプル）

「持ちたい」理由



「持ちたい」理由の自由記述より

- きょうだいがいたほうが子どものためだと思うから
- 自分たちが死んだ後、子どもが一人だとかわいそうだから。家庭でも同じくらいの年の人がいたほうがよいと思うから
- 家族が増えることは幸せなことだし、高齢化社会の中でゆくゆくは自分自身に安心を与えてくれるひとつになると思うから
- 男の子１人なので次にはどうしても女の子が欲しいから

「持ちたくない」理由 （人）

お金・生活が心配	347
今の人数で十分	208
自分の年齢を考えて	39
大変だから	30
その他	77

「どちらともいえない」理由 （人）

お金・生活が心配	329
今の人数で十分	58
いい面と悪い面がある	39
その他	308

47.9%が「もう一人子どもを持ちたい」と回答している。「持ちたくない」は23.7%　。「もう一人持ちたい」理由は、「子どものために・一人っ子ではかわいそうだから」が多い。一方「持ちたくない」「どちらともいえない」理由では、「お金がかかる・生活が大変になる」といった経済的な理由が多く見られる。また、子どもの年齢が低いほど「持ちたい」と回答する割合は高くなっていた。

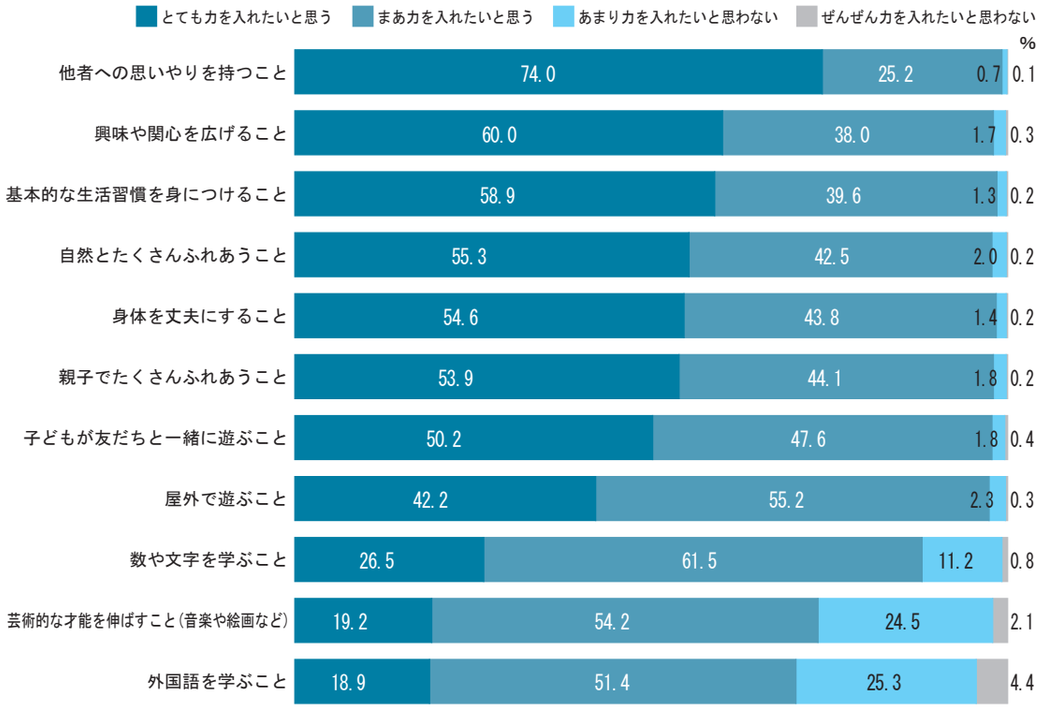
2 父親の子育て観・教育観

1 「他者への思いやり」「基本的な生活習慣」に力を入れたい

子育てで力を入れたいと思うことについてたずねたところ、「他者への思いやりを持つこと」に「とても力を入れたいと思う」と回答した比率は、74.0%ともっとも高かった 。

Q あなたは、どのようなことに力を入れて、お子さんを育てたいと思いますか。

図2-1-1：どのようなことに力を入れて、子どもを育てたいと思うか



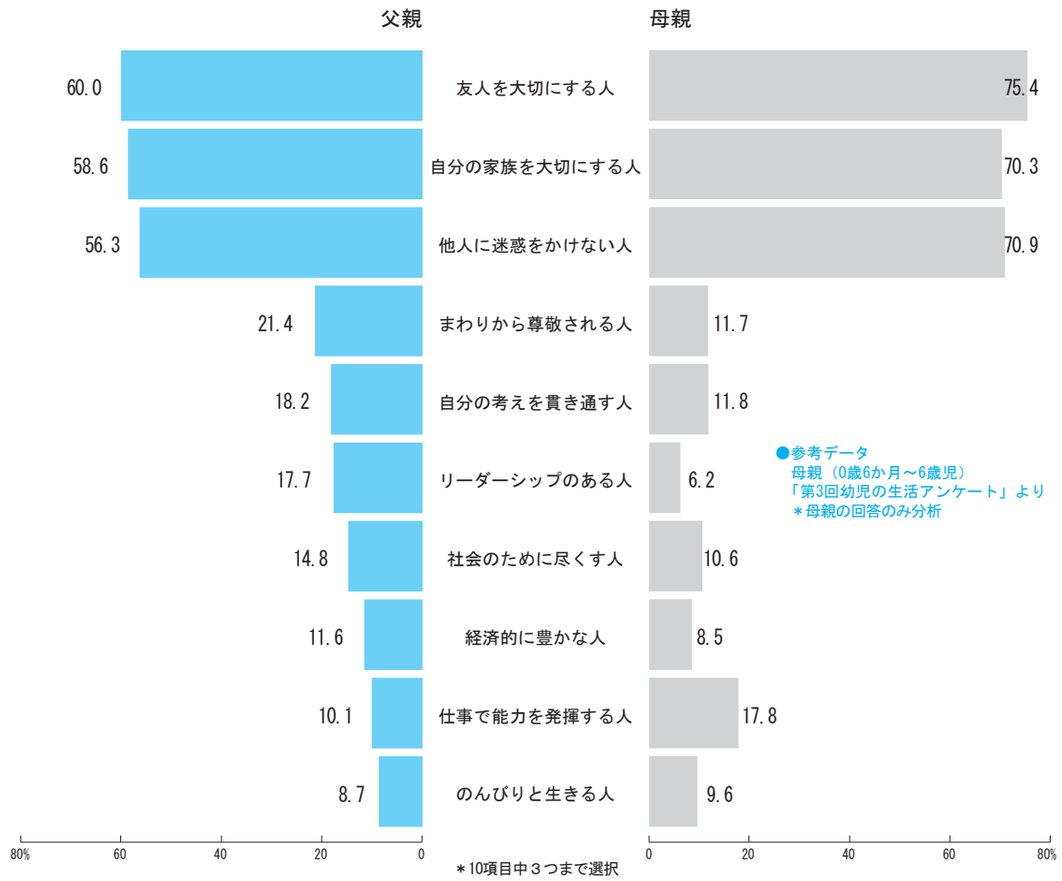
「とても力を入れたいと思う」の数値が高かったのは、「他者への思いやりを持つこと」「興味や関心を広げること」「基本的な生活習慣を身につけること」であった。その一方で、「芸術的な才能を伸ばすこと」「外国語を学ぶこと」は２割以下であった。多くの父親が、人間関係や興味関心を伸ばすことに力を入れたいと思っていることがわかる。

2 将来は、「家族や友人を大切にする人」になって欲しい。

将来どのような人になってほしいかについて聞いたところ、「友人を大切にする人」「自分の家族を大切にする人」「他人に迷惑をかけない人」といった人間関係に関連する項目の数値が高い。

Q お子さんに、将来どのような人になってほしいと思いますか。

図2-2-1：将来どのような人になってほしいか



参考のために別のアンケートで母親に同じ項目で調べた結果と比較してみると（2005年「第3回幼児の生活アンケート」Benesse教育研究開発センター）、数値の高い3項目（人間関係に関する項目）は、一致している。母親は、トップの3項目がそれぞれ7割以上を占めており、意見が集中しているが、父親の場合は、トップ3項目は6割前後であり、ほかの項目も2割前後に分布していることから、母親よりは多様な考え方を持つ人がいることがわかる。

3 父親の約８割が、子どもに大卒以上の学歴を望んでいる。

子どもの進学期待については、「大学卒業まで」と「大学院卒業まで」を合わせて、8割弱にのぼる。「高校卒業まで」は約１割にとどまった。

Q 現在、お子さんをどの程度まで進学させたいとお考えですか。

図2-3-1：どの程度まで進学させたいか

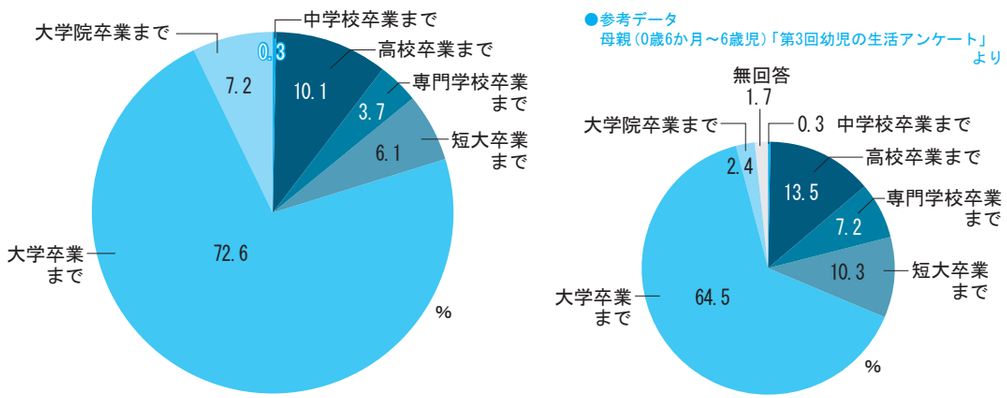
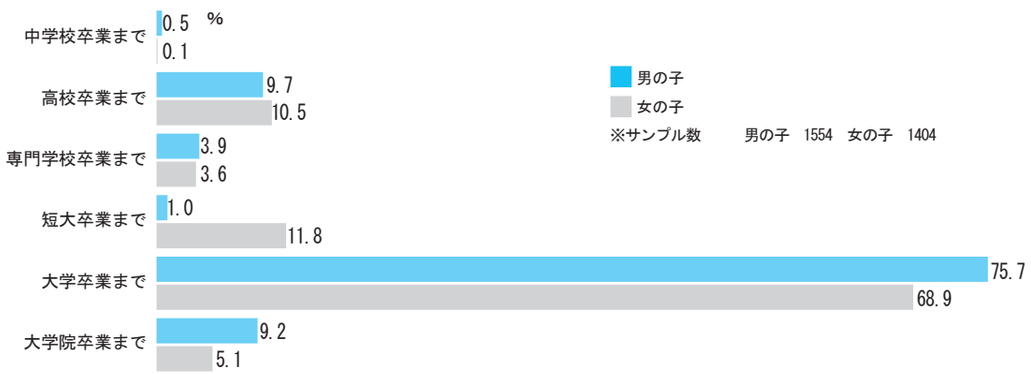


図2-3-2：どの程度まで進学させたいか（子どもの性別）



進学期待について、参考のために、母親に実施した調査結果（2005年「第3回幼児の生活アンケート」Benesse教育研究開発センター）と比較すると（図2-3-1）、父親のほうが「大学卒業まで」「大学院卒業まで」をより多く期待する傾向にあった。

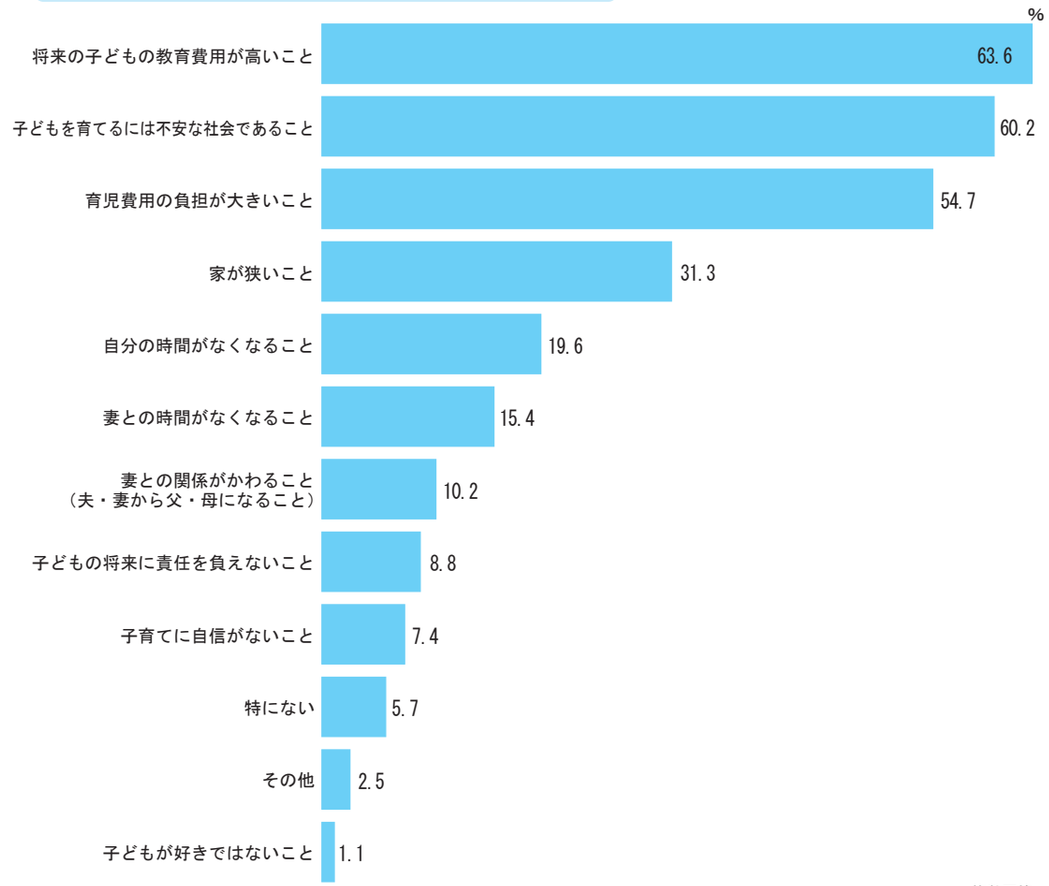
父親の進学期待を子どもの性別で見ると（図2-3-2）、「大学卒業まで」「大学院卒業まで」では男子の方が高くなっている。女子では「短大卒業まで」が「大学卒業まで」に次いで高くなっており、男子に高学歴を求める傾向が現在も見られるようだ。

4 今後、不安なことは「教育費・育児費用」と「不安な社会」

父親として不安なことのトップは「将来の教育費」。3番目の「育児費用の負担が大きいこと」とともに、子どもを育てるための経済的不安が上位にきている。

Q 父親として、今後不安なことはありますか。

図2-4-1：今後不安なこと



トップの「子どもの教育費が高いこと」は、40代がより高くなっており（20代62.7%　、30代63.0%、40代66.1%）、一方「育児費用の負担が大きいこと」は、20代が高くなっている（20代60.5%、30代55.7%、40代48.9%）。子が成長するにつれて、経済的負担が教育へシフトする様子がうかがえる。

2番目の「子どもを育てるために不安な社会であること」は、子どもが大きくなったときの社会の先行きが不透明であることや、治安の悪化などが考えられる。